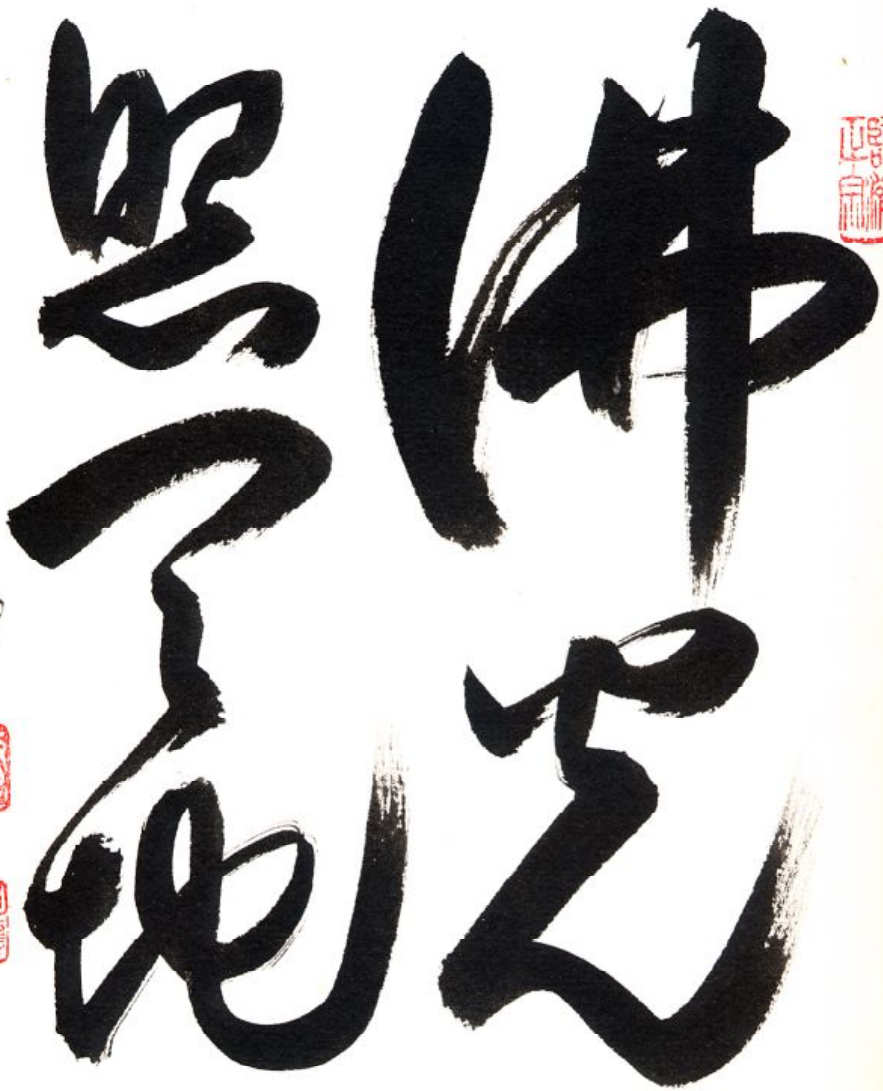


圓福寺報



金鳳山主



「仏光天地を照らす」
金鳳山主「放牛窟」
「圓應道人」

圓福寺報 第五十号
平成二十年一月一日発行
発行者 臨濟宗妙心寺派 圓福寺
千葉市稲毛区穴川町三七五 TEL(二五二)九一八一
<http://www.bnet.co.jp/enpukuji/>
E-mail: enpukuji@come.bnet.co.jp

埼玉県新座市 平林寺専門道場 前師家 糸原圓應老大師御染筆

目次

年頭法話	2
「誰かのためになつたかな」	4
第十三回四国あるき遍路の旅	10
禅童会、子どもたちの感想文	10
——寺報五〇号に寄せて	
「坐禅会 私の二〇年」	10
花園 渡辺 勇	10
宗達禅士、専門道場から帰山	14
平成二十年 年回表	15
供養のご案内	15
15	
「永代供養」「樹木供養」	16
お寺と和尚の日録抄	16
平成二十年年間行事案内	17
「詠歌」「写経会」案内	18
「土曜会」案内	19
第26回花園会ゴルフ大会報告	19
圓福寺新年会のご案内	20

年頭法話

「誰かのためになつたかな」

■ねずみは、見ませんが・・・

昨年暮れに、部屋の天井裏で、「ピーピー」と動物の鳴く声がしはじめました。天井裏にもぐりこんだネコが子どもでも産んだのではないかと、懐中電灯片手に、網を持って天井裏に上りました。断熱材の中にいる小さな生き物を捕まえると、額の真ん中に白い縦じま、「ハクビシンだ!」。県内のお寺や知り合いのお寺でハクビシンが見つかったというのを、他人事のように聞いていたのですが、圓福寺にも出現するとは思っていませんでした。

子どもの頃には、夜中に、米びつをガリガリかじる音に気づいて、忍び足で近づいてネズミを捕まえようとしたり、飛び出してきたネズミを

追い掛け回したりというのが、日常的だったような気がします。千葉に移り住んだ頃には、お寺にもネズミがいました。お墓にも、お供え物を狙う丸々と太ったネズミがいました。が、そう言えば最近姿を見かけないと思つたら、ハクビシンなんか住み着いていたのでは、近寄るわけがありません。

■ねずみのたとえ話

今年にそふじをかむは、子年です。仏教に「二鼠にそふじをかむ嚙藤の喩」という話があります。

昔、ある人が罪を犯して罰せられるのを恐れて逃げました。王様は、酒を飲ませて気の荒くなった象に、その男を追わせました。その男は逃げる途中、丘の上にあった枯井戸に

あわてて入り込み、井戸の途中から生えていた草につかまって隠れました。ところが、自分が掴まった草は腐りかけている上に、二匹のネズミが

その草を噛んでいます。井戸の底に降りようと、下を見ると、悪龍が毒を吐きながら落ちてくるのを待っています。そうこうしているうちに、酔つた象に見つかつてしまい、長い鼻を伸ばして捕まえようとしてきます。それでなくても、体重の重い象がドスンドスンとやったら、掴まっている草がいつ切れるかわかりません。

このたとえ話は、「この身はくじょう丘井の如し」とサブタイトルがついているように、この身つまり私たちがおかれている状態は丘の上の枯井戸の中にいるのと同じだと言っています。腐った草は、私たちの寿命をい、二匹のネズミは月日の過ぎ行く



時間を意味しています。私たちのいのちは、いつ途切れるかわからず、そのわからないことをいいことに、自分はまだ大丈夫だろうと勝手に決め込んで、二匹のネズミが草を噛んでいくように、その日その日の月日を送っています。

こう聞くと、私たちのいのちのはかなさに怖さまで覚えてしまします。たとえば話は次のように続きます。

ネズミがかじっている、腐りかけた草につかまった男は、まさに進退極まり、大いなる恐怖を覚えしました。そこに、頭上の一本の木の先から一滴の蜜がぼたりと彼の口に落ちました。男は、口の中に広がるその甘さに、一瞬恐怖を忘れました。

いのちのはかなさや、いつ終わるともわからないその時と背中合わせにいる恐怖に気づくと、それから逃れようと思います。その方法の一つとして、一滴の蜜を言っています。

恐怖を逃れるための、刹那的な方法です。一時の楽しみや満足を得ることとで、少しでも恐怖を忘れることができればいいのです。でも、これでは恐怖がなくなっただけではありません。逆に、恐怖と刹那的なものとのギャップで、恐怖は余計大きなものになりかねません。

■「安心」を得る方法

いのちのはかなさに対する恐怖から逃れることを、禅宗では「安心」といいます。一滴の蜜の味で、その間だけ恐怖を忘れるのとは違います。いついのちが終わろうとも恐怖に駆られず、安らかにいられるころです。

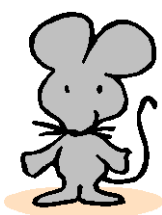
そのための方法として、坐禅・写経・遍路などたくさんの方があります。それは、どれもが「俺が・・・」「私が・・・」というものを取り去る修行です。そこで、人は一人で生きていくのではないと知ります。そのことに気づいたら、次

に、「今日は誰かのためになったかな」「今日は何かのためになったかな」と自分の一日を振り返ることで

といっても、大それたことではありません。優しいことばでも、あたたかな笑顔でも、草木に対して水をやることでも、寝たきりでも生きていてさえくれればこの支えにもなります。何かのためになっていることを知ること「安心」を得ることができるので

そのようなころの様を、「ネズミの、穴に隠るるが如し」と法句経ではいっています。巣穴に入ったネズミは、悪がきに追い立てられることもなく、安心していられますから・・・。

こんなお話も、
「誰かのために
なったかな」。
今年の座右の銘に
いかがでしょうか。





平成十三年三月からはじめた「四国あるき遍路の旅」も、足掛け七年、去る十一月二十二日から二十五日までの第十三回目で、高野山への御礼まいりと妙心寺への参拝を済ませ、満願を迎えることができました。十三回目のあるき遍路はさておき、今号では、今までの軌跡を振り返ってみることにしました。



お礼まいりで、一番靈山寺に戻って参りました。

■ 第一回 観光気分で・・・

平成十三年三月三日～五日

札所 一番～十番

歩行距離 三五・六km

参加 九名

記念すべき第一回。手探り状態で四国に出かけました。住職も、このときは作務着姿でした。札所参りも、初日と二日目だけで、三日目は鳴門のうずしお見物に行きました。

すでに七年も前なので、確かな記録が残っていないのが残念ですが、会計報告に「写真現像代」とあるように、まだデジカメが当たり前ではなかった頃です。



第一回の遍路、八幡熊谷寺にて（寺報三十三号より）

■ 第二回 試練の焼山寺

平成十四年三月二日〜四日

札所 十一番〜十九番

歩行距離 三四・七km

参加 九名

本格的に四国あるき遍路がスタート。最初の試練は、初日の昼食。食堂などなく、村の雑貨屋さんで買ったおにぎりやパンを北風の吹きつける公園の東屋で食べました。徳島は、発心の道場と言われ、その発心が確かかどうか試されるような、焼山寺までの遍路道も、なんとか歩くことができました。



十八番恩山寺前のバス停を拝借して、一休み。札所まで後一キロぐらいか？（寺報三十五号より）

■ 第三回 徳島を打ち終える

平成十四年十一月二十二日〜二十四日

札所 二十番〜二十三番

歩行距離 十八・〇km

参加 十二名

二日目に、山の中の難所があるため、初日の午後は自由行動でした。二十番鶴林寺と二十一番太龍寺は、難所でした。苦勞して歩いてきたので、紅葉がなお一層きれいでした。時間の関係で、太龍寺からはロープウェイで下山し、「わじき温泉」泊。捕れたばかりのいのししの味噌煮を、ごちそうになりました。



二十一番太龍寺の山門に、ようやくたどり着きました。一同、安堵の表情。（寺報三十七号より）

■ 第四回 土佐くろしお鉄道で

平成十五年三月七日〜九日

札所 二十四番〜二十九番

歩行距離 三十七・一km

参加 十三名

四回目で高知県に入りました。空港に着くなり、すぐに歩き始めた遍路でした。

二日目に、土佐くろしお鉄道と路線バスを乗り継いで、室戸岬の二十四番最御崎寺に行きました。



三日目の帰りは、電車もバスも飛行機もぎりぎり間に合うという離れ業をやってのけました。

「どこまで続くのか？」
二十七番神峰寺からの下り道（へんろ記録集より）



■ 第五回 しぐれて行くか

平成十五年十一月二十八日～三十日

札所 三十番～三十六番

歩行距離 二十九・三km

参加 十五名

第五回の遍路は、雨・雨・雨でした。あるき遍路の旅始まって以来の、雨にたたられた遍路でしたが、雨もまたよし。雨に濡れた札所の石段と真っ赤な紅葉は見事でした。浦戸湾では、渡し舟にも乗りました。清流仁淀川は、雨で増水し濁流となっていました。



山頭火の詩に、「うしろすがたのしぐれてゆくか」とあります。第五回は、まさにそのような遍路でした。(へんろ記録集より)

■ 第六回 足摺と雨の松尾峠

平成十六年二月二十七日～二十九日

札所 三十七番～四十番

歩行距離 三十・〇km

参加 十四名



いよいよ土佐の札所の最終回です。四万十川を越え、足摺岬へと歩きました。四万十川の夕焼けや黒潮の海の日の出などを見ることができましたが、三日目は雨。しかも、土佐から伊予への関所があったといわれる松尾峠への急な登りでした。土佐は「修行の道場」といわれる所以を、心底味わいました。



足摺へは海辺のへんろ道もありました。(へんろ記録集より)

■ 第七回 昼飯にありつけず

平成十六年十一月二十七日～二十九日

札所 四十一番～五十番

歩行距離 四十・七km

参加 十五名

初日に松山周辺の札所を歩きました。二日目は宇和地方の札所でした。札所前の店でお昼ごはんをと思っいたら、食事になるようなものはなく、敢えなくわずかなお菓子を昼ごはんの代用にしました。この経験から、昼飯にありつけそうもない時には、朝にコンビニのおにぎりを携えることを覚えました。



効果観面で、三日目には、道端でおにぎりを食べるようになりましたが、二日目のことを思うと、本当にありがたい昼ごはんでした。



お弁当とうもも持たずに峠越え。皆で分け合ったお菓子やアメがごちそうでした。(へんろ記録集より)

■ 第八回 二班に分かれて

平成十七年三月一日～三日

三月五日～七日

札所 五十一番～五十九番

歩行距離 五十七・七km

参加 二十名

道後の石手寺から今治へ出て、瀬戸内沿いに東に辿ったのが、第八回でした。

この回は、人数が多かったので二班に分かれての遍路でした。住職は、二回とも先達しました。「同じ道でも、人が違う、天気が違うと、見えるものを感じるものが違うんです。」(住職)



五十六番泰山寺から五十七番榮福寺へのへんろ道にて(へんろ記録集より)

■ 第九回 伊予の難所

平成十七年十一月二十五日～二十七日

札所 六十番～六十五番

歩行距離 三十四・九km

参加 二十一名

人数が多くても、みんな揃って行くというところで、二十一人の大部帯で伊予の難所六十番横峰寺を目指しました。

台風の被害でへんろ道を木や石ころなどが散乱し、沢を渡る木の橋が流されていたりしましたが、全員怪我なく歩きました。

横峰寺だけでなく六十五番三角寺も、急な下り坂が続く難所でした。

三角寺を終えて、高速バスで高知に出て、高知空港から帰路に着きました。



長い下り坂を下りて、思わず一寝入り(へんろ記録集より)



■ 第十回 最後?の難所

平成十八年二月二十五日～二十七日

札所 六十六番～七十五番

歩行距離 三十七・二km

参加 二十二名

久しぶりの徳島空港。電車・バスを乗り継いで、阿波の谷底から六十六番雲辺寺の急坂を登りました。登りがきついと思ったら、下りは標高千メートル弱の札所から八百メートル以上の標高差を一気に下りなければならず、きつく長い下りでした。

この回は二泊とも温泉と、宿には恵まれましたが、二日目は冷たい雨。でも、名物さぬきうどんが、冷えた体を温めてくれました。安い・早い・うまい、日本のファーストフードです。



七十一番弥谷寺から普通寺に向かう、竹林のへんろ道(へんろ記録集より)



七十九番高照院を出て、五色台をはるかに眺めながら、堤防の上のへんろ道に行く。五色台の山中に八十一番白峰寺と八十二番根来寺がある。(へんろ記録集より)

■ **第十一回 さめきうどん遍路**
 平成十八年十一月二十三日～二十五日
 札所 七十六番～八十三番
 歩行距離 五十一・四km
 参加 二十二名

丸亀・坂出そして高松へと歩きました。三日間とも、昼食は「さめきうどん」。店それぞれに、だし・うどんの味が違っていて、またそれぞれ美味でした。

あるき遍路の中で、二番目に距離を歩きました。平地から山越え、そして高松の平地へと出てきました。そろそろ、結願が脳裏をかすめ始めます。



結願への試練とばかりに、冷たい雨風。八十八番では一同バンザイ(寺報四十九号より)



■ **第十二回 結願とお礼参り**
 平成十九年二月十七日～十九日
 札所 八十四番～八十八番
 歩行距離 四十八・六km
 参加 十八名

ついに結願を迎えました。しかし、その前にロククライミングのようなへんろ道が立ちはだかりました。へんろで四つんばいは初めてでした。

一同、少しだけ感慨に浸りました。結願の次の日からは、お礼参りが始まります。十番まで戻ったのですが、かなり距離がありました。



じ意味を持つているような気がします。ところが、お礼参りをして一番に着いたら、八十八ヶ所を一周したことになり、それは、また一番霊山寺にて

■ **第十三回 四国、それは輪廻**
 平成十九年十一月二十二日～二十五日
 札所 八番～一番
 高野山・妙心寺
 歩行距離 三十・一km
 参加 十八名

一番霊山寺に着き、本堂に向かうと、見覚えのある池・多宝塔などに懐かしさを感じるのですが、四国八ヶ所を一巡したのにも関わらず、こころに何の変化も感じられません。

八十八番にたどり着いたときには、さすがに感無量でした。それはこれで終わりだと思っただけです。もう先がない終わりだから、それは「死」と同じ意味を持つているような気がします。ところが、お礼参りをして一番に着いたら、八十八ヶ所を一周したことになり、それは、また一番霊山寺にて

始まりを意味しています。それを「輪廻」といつてもいいでしょう。私たちの普段の生活も、一日一日、日々朝を迎えて、何気なく、いつもと変わらない日を送っています。そこに何の変化も、感慨もないように、お参りで一番に着く気持ちも同



【上】高野山大門
【下】奥の院前にて読経する



妙心寺微妙殿にてお参りをする。

福寺あるき遍路の旅もこれで終わることなく、再び、一番から歩き始めることになりました。第二巡目は二月からです。



そこで、圓は、遍路がひたすらに歩くのと同じように、一日一日をひたすらに送ればいいことに気づくのです。

じなのかもしれませぬ。しかし、その何の変化もないことが、なによりありがたいと、お礼参りを終えて思えるのです。当たり前にごはんを食べることができ、寝る場所があつて、なにより丈夫な足や体があつて・・・、その当たり前にうれしい、ありがたいと感じられてくるのです。平常とか無事が尊ばれる所以です。そして、遍路をした者

圓福寺寺子會 第16回

「禪童会」

平成19年7月21日(土)～22日(日)



坐禅して「食う・寝る・遊ぶ」で
なにを感じたか？

毎年夏休み最初の土日に、一泊二日で開催している「禪童会」。

平成十九年は、十九人の参加者で、楽しくきびしく行われました。坐禅・茶道体験・うどん作り・すいか割りなどの盛りだくさんの中身を花園会有志の方々がお手伝いしてくださって、子どもたちにも有意義な時間を持ってもらうことができました。

◆ 禪童会での座禅

柏台小四年 舘野 真穂

私は、禪童会にははじめてきました。その中でも、私が一番つまかったのは、座禅です。座禅は、ずっとずっと、あぐらみたいになすわり方ですわっていません。さいしょの座禅は、一



寺報五〇号に寄せて

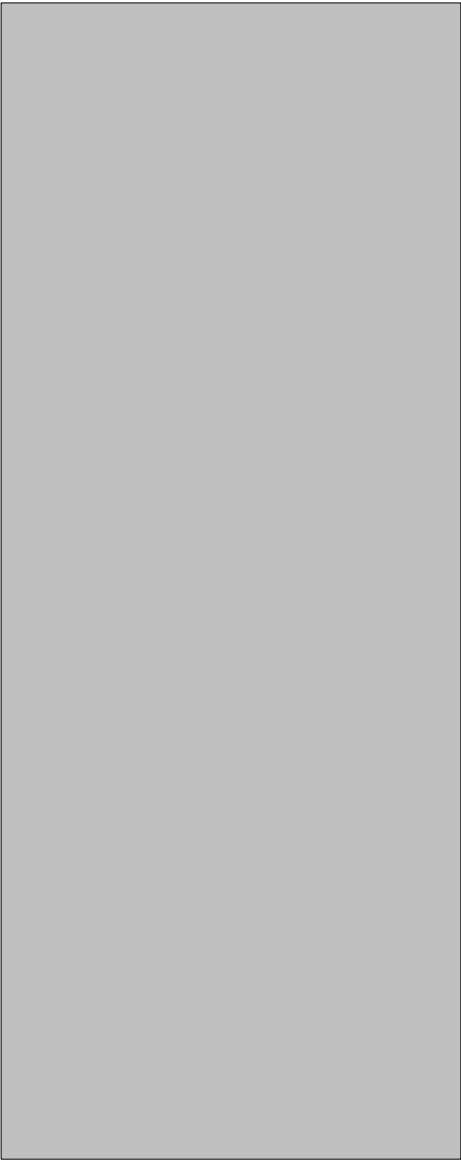
「坐禅会 私の二〇年」

花園 渡辺 勇

「坐禅を指導してください」と、見知らぬお寺の門を叩いたのが、二〇年前の春でした。「一緒に坐りましょう」と宗格和尚さんが導いてくれました。当時、宗格和尚は円福寺に入山されたばかりでした。そうとも知らず、私は禅宗のお寺だから、坐禅をさせていただけるのではないかな、と淡い期待を持って訪れたのです。

それがご縁で、爾来、毎週木曜日の夕刻六時から七時まで、余程のことがない限りは坐禅会が催されました。当初は和尚も若くて、指導はめりはりの効いたきびしさがありました。今では和尚さんも丸くなってあまり作法などの注意をされなくなりました。一方われわれ居士も、当初はピツと背筋が伸び、腰がぐわつと入って、汗が全身にたたりと流れるような緊張感をもって坐禅をしました。いまでは老人体形になって背筋に天地を支えるようなぴりりとした力がなくなつたように感じます。二〇年という歳月の可笑しさでしようか。

禅童会日程表



番さいしよなので、とても、つらかったです。二回目は、おしよさんがけいさくを持って、私たちの様子を、よく見ていました。私は、その時、はらはらどきどきして座禅をしていました。なんとその時、なつみちゃんも、もう一人男の子が、すごく大っきい音で「バシーン」と、おしよさんに、たたかれていますので、すごくいたそうでした。そ



れに、右と左の、背中を合わせて四回もたたかれました。私はその時こう思いました。「もう、座禅なんかやだー。」と思いました。でも三回目の、座禅では、おしよさんが、「この座禅は、おしよさんのために、やってるわけじゃないんだよ。自分のために、やっているんだよ。」と言って私は、座禅を、めんどくさがらずにちゃんと、一生けん命やろう。と思いました。でも、やっぱり、座禅はきつかったで

「継続は力なり」、という言葉があります。二〇年はどんな力を私にもたらしてくれたでしょうか。仏教は釈尊ひとりの内なる体験にその淵源をもつことは事実ですが、仏教はそれだけで成り立っているではありません。釈尊の体験を受け継ぎ、次に伝えるという人間の営みをおして仏教は存在しているのだと思います。ひとりの修行者（菩薩）の内なる体験の世界が、道を求めようとするひとりの青年（求道者）にむけてさしだされ、青年が自己のなかに受け取る、つまり仏法の伝達がおこなわれたことによって仏教は存在します。坐禅は、釈尊の体験した内面や、禅宗祖師たちの悟りの体験を、伝え、受け取る、ために必要な修行方法なのです。私はこの二〇年、それを求めて坐禅をしていました。最近ようやくそのことを受け止められたように感じています。見性体験といえます。では、それはなにかと問われると、なんとも言葉には出せないものです。ただ意識の動いているところ、妄想が湧いて出てくるところに、どかりと坐り込んでいると、「なあん

【左】庭でスイカ割り
りをしました。



す。やっぱり私は、動いてしまいましな。そんな自分のことを、だめだなー。と

思いました。そして、禅童会さいごの座禅では、あまりいたくなくて、後半でもぜんぜんいたくなくなかったです。

他にも、スイカわりや、ちようちん作り、うどん作りや、茶道体験などを、やりました。私は、禅童会に来て、よかったです。

できれば来年も、来たいです。



◆ぜんどう会で

身につけたこと

園生小四年 能勢 絵里子

私はぜんどう会でたくさんのお話を聞きました。でも、おしよさんの話を聞いてみんなもこんなにならなうと思いましたが、友達を思いやる気持ちがつきました。

私が一番大変だと思ったのは食事です。じゅん番



だ、そんな簡単なことだったのか」と気づきます。誰にでも、私の経験したことは経験できるはずです。ですからどうか円福寺の坐禅会に参加をしてください。自分が仏になる、ことを高尚なこと、そんなことはとても無理、なことだとおもわずに、じつと坐っていれば分かります。実感することができると思います。白隠禅師の和讃に「衆生ほんらい仏なり」とあります。それを身をもって体験できます。

ただその体験を言葉で説明しようとすると的外れ。ですから、祖師たちは、弟子が仏とはなんだとか、かんだとか、概念や仏教の知識や分別をもちだすと、即座に否定して、そんなものではないぞ、と弾き飛ばしてしまします。俗に心が通じる友などといいますが、どこまで心が通じているのかの保証などありません。心から心へ伝えるというものは、げにまっこと、むずかしいものです。自分で自分を証明するしかないようです。

禅宗は「教外別伝、不立文字」という旗印を掲げていますが、釈尊の体験したもの（お経）や文字では不可能だから、心から



いつもとちがってきんちょうしました。でも、最後のうどん作りで作ったうどんを食べたら自分で時間をかけて作ったものだから残せないなど思って、家でのことを思い出したらいつもおなかいっぱいとか言って残してしまっていたなと思います。これからは、お母さんが時間をかけて作ってくれたんだからとも思っただけ残さず食べようと思いました。

私がぜんどう会で一番うれしかったのは、来るまで友達ではな

どおりにそろえたりしてよそってもらうときも手であいずをして、なにより食事中は話をして

かった人と友達になれたことです。来る前まではすぐきんちょうして来てたら、だんだん友達がふえていきました。たくさん遊んで友達と仲よくなって、人とのつながりのはばが広くなりました。

ぜんどう会に来て身に付けたことはまだまだたくさんあるけれど、ざぜんで自分のことを反省したりしたのが一番いい経けんになったと思います。これからはこの2日間のたくさんさんの経けんを生かして夏休みあけには、ざぜんするとき思ったことなどを思いだして学校でやく立てたいと思います。

【下】お寺のお風呂に、友だちと一緒に入りました。



直接心へと伝える、と謳っているわけです。では坐禅をすれば、それは伝わってくるのでしょうか。たしかに私も坐禅の体験のなかである種のヒントのようなものはなにか味わったことがあります。しかし、最終的には、祖師たちの「語録」をたくさん読んでそのなかで、気がついていったのです。

いまから六年前の、二〇〇一年に宗格和尚が企画してくださって、中国広州の六祖恵能禪師のお寺を訪ねる旅行をしました。その南華寺というお寺で六祖の真身仏（ミイラ 左の写真）に拝謁しました。まるで生きておいでのように坐禅をしているお姿でした。現在のすべての禪宗（臨済宗も曹洞宗も）はこの六祖恵能禪師を源流としています。その教え「壇経」に、『念とはありのままの本性を念ずることである。ありのままです。』



宗達禪士、専門道場から帰山。

一昨年、九月二十七日に平林寺専門道場に入門いたしました宗達禪士が、一年間の修行を終え、昨年十月十二日に帰山（お寺に帰ってくる）いたしました。

修行中は、朝三時起床、朝の勤行、坐禅、庭掃除、作務（野良仕事）。夕方から再び坐禅、そして夜坐（消灯後の坐禅）、十一時頃に就寝という日常を送ります。また、一週間



のきびしい期間が年に六回あり、その間はほぼ一日坐禅。夜坐も十二時すぎまでとな

り、睡眠時間には三時間弱まで減らされます。

十二月の一年で一番きびしい期間

には、一週間の間、横になって寝ることすら許されなくなり、

それ以外にも、托鉢、儀式作法の習得、他寺の手伝いなど、道場で生活すること自体がすべて修行という生活を送って参りました。

一応、一通りの修行を終えて帰山いたしました。今後、入寺するご縁が熟すまでの間、圓福寺に籍を置いておりますので、檀信徒の皆様には、なにとぞよろしくご法愛のほどお願い申し上げます。



あることは、つまり念の本体であり、念はすなわちありのままであることの働きである。』

六祖のことばをいつも身につけておくようにと、私の左手には南華寺で購入した腕輪がつねにはめられています。（右の写真）



すこし難しいけれども、このことが如実にお分かりいただけたら、五千年前の「釈尊の内なる体験」を理解したことになります。ひとの深い内的な経験を、他者に伝えるのには観念や概念や知識では伝えることができないのだと、禅宗では主張します。ですから、禅には独特の「問答」というのがあり、師弟はその場で真理を商量（あれこれ比べ合わせてよく考えること）をします。そのやりとりが論理を超えているものから、落語などで分けの分からないものの代名詞として「禅問答」がこっけいに扱われたりします。昔、私も「無字」の考案をいただいた

平成十九年下期お寺と和尚の日記抄

8月5日	写経会 八月盆棚経 佐倉報恩寺施餓鬼 佐倉宝樹院施餓鬼 佐倉円心寺施餓鬼 四街道清久寺施餓鬼 取手長禅寺施餓鬼・法話 佐倉円通寺施餓鬼 地藏盆
9月2日	写経会 東京教区第7部部内会 於圓福寺 社会保険センター、「写経」講座 ご詠歌講習会 根岸円光寺秋彼岸法要・法話 幼稚園、入園説明会 幼稚園「親子コンサート」 社会保険センター、「写経」講座 幼稚園「運動会」 写経会
10月3日	写経会 ご詠歌講習会 平林寺金鳳会 於塩原 社会保険センター、「写経」講座 涅槃精舎毎歳法要・授戒会
10月6日	写経会
10月7日	写経会
10月15日	ご詠歌講習会
10月17日	社会保険センター、「写経」講座
10月21日	涅槃精舎毎歳法要・授戒会

10月31日 社会保険センター、「写経」講座
11月1日 幼稚園新入園児願書受付
来年度の新入園児として、3才児75名・4才児23名を受付しました。

7日～9日 妙心寺開山無相大師六五〇年
東京教区第七部団体参拝 53名参加
14日 第二十六回花園会ゴルフ大会 於山田GC
17日 市原別院収穫祭(土曜会)
20日 臨済宗東海地区ソフトボール大会 於東京
22日～25日 第十二回四国あるき遍路の旅
(八番～一番、高野山、妙心寺) 十八名参加
12月5日 社会保険センター、「写経」講座
6日～7日 役員研修会、於九十九里・東金
8日 幼稚園「おさらい会」
15日 歳末ボランテラ・花園会忘年会

▽毎週木曜日午後六時～ 木曜坐禅会
坐禅三十分二回、終わって茶話。無料。初心者歓迎。

▽毎月第三土曜日午後六時～ 土曜会
お寺とあなたを結ぶ自由空間。会費二千元。

▽毎月最終火曜日午後四時～ ご詠歌練習
「般若心経」の写経。見やすい大ききの字体です。
正座できない人のために、イスとテーブルも用意。
一期五回(事前申込制)。会費三千元。

平成二十年 年間行事予定表

1月

【一月一日〜三日】
元朝まいり・新年修正会
仏教興隆・国家安泰・五穀豊穰・檀信徒各家の繁栄などを祈禱する法要をしています。
この修正会で祈禱した「般若札」は、寺報・カレンダーなどと一緒に、みなさまにお届けいたします。

【一月二十日】
花園会新年会

寺報十六頁のご案内をご覧下



2月

【二月五日】
涅槃会

お釈迦様のお亡くなりになった日。涅槃会
の掛け軸を掛けて法要をします。

【二月二十九日〜三月二日】
第一回四国あるき遍路の旅

【三月十六日】

彼岸会法要・先住職七回忌
あらためてご案内を郵送いたします。

【三月十八日〜二十四日】
春彼岸

【三月二十八日〜三十日】
冬の寺子屋、苗場スキー

8月

【八月十日〜十六日】
八月お盆の棚経

みなさまのお宅に棚経にお伺いします。

7月

【七月六日】

山門大施餓鬼会

【七月九日〜十六日】
七月盆の棚経

みなさまのお宅に棚経にお伺いします。

【七月二十六日〜二十七日】
圓福寺寺子屋「禅童会」

子どもたちの坐禅会です。坐禅だけでなく、楽しいゲームやいろいろな体験もできます。たくさんさんの参加を待っています。

5月 4月

【四月八日】
降誕会

お釈迦様のお生まれになった日。「はなまつり」。

【五月二十一日】
第二十五回花園会ゴルフ大会



【七月五日】
初盆・新入檀信徒施餓鬼会

この日は、初盆のほとけさまと、圓福寺と新しくご縁のできたほとけさまの施餓鬼会をいたします。あらためてご案内を差し上げます。

12月

【十二月三十一日】
年越しまいり

あまざけ・年越しそば・福だるま・新春祈
禱など、たくさんお参り下さい。



11月

【十一月十四日〜十六日】
第二回四国あるき遍路の旅

【十二月八日】
成道会

お釈迦様が悟りを開かれた日です。

10月

【十月五日】
達磨忌

禅宗初祖「達磨大師」のご命日。

【十月二十二日】

第二十六回花園会ゴルフ大会

【十月二十六日】

涅槃精舎毎歳法要

永代供養の方々の法要と、授戒会。

【八月二十三日】
地藏盆
水子・人形・ペット供養
子どもたちの楽しいお盆の行事です。夜店
やゲーム大会など盛り上がります。併せて、
地藏盆供養の法要も行います。



御詠歌

花園流ご詠歌の支部結成に向けて、練習をはじめていきます。ご興味のある方は、男女問わずお寺までお気軽にお問合せください。昨年からは、講師の先生をお招きし、わかりやすいご指導の下、初心者ばかりの男女混声で練習していきます。見学歓迎、参加更に大歓迎です。

【期日】

毎月第二・第四木曜日

【時間】

午後四時～六時

【会費】

半年で三千元

【講師】

山梨県 楽音寺住職

内藤 睦雄師

【定員】

たくさん

【申込】

特に必要なし。

問合せは

お寺まで。



写経会

【前期期日】

二月三日

三月九日

四月六日

五月十一日

六月八日

【後期期日】

六月二十九日

八月三日

九月七日

十月五日

十一月二日

【時間】

午後一時半～三時半

【会費】

一期五回で、花園会員三千元

会員外 五千元

【用意するもの】

小筆、硯、墨、半紙

(写経用紙はお寺で用意します。)

【定員】

二十名

【申込】

お寺までご連絡ください。

【講師】

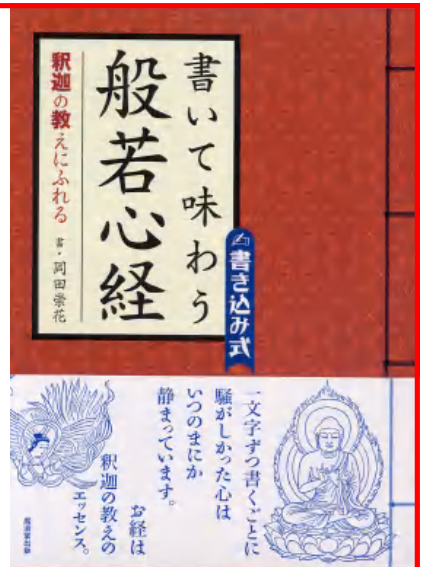
齊藤 加代子先生・住職



圓福寺写経会講師、齊藤加代子先生が解説の筆を執られた本が出版されました。

この本は、現代人がなれているペンで、直接書き込みながら、般若心経の写経ができます。また、お経の意味の解説や一字一字の形の整え方なども親切に書いてあります。

写経にご興味をお持ちの方にはうってつけの本です。この本をご覧になって、「さらに・・・」という方は、ぜひ圓福寺写経会に足を運んでください。



編集 廣濟堂出版編集部
発行所 廣濟堂出版
定価 千四百円＋消費税

土曜会

この集まりは、圓福寺にご縁のある人が、お寺に集まり懇親・談笑する自由空間です。

【期日】

- 二月十六日 春の俳句講座
- 三月二十一日 法話会
- 四月十九日 歩禅会
- 五月十七日 市原(予定)
- 六月二十一日～二十三日 国東・湯布院の旅

【時間】

土曜日午後六時～
テーマイベントの後、懇親会

【会費】

花園会員	男性	二千円
	女性	千円
花園会員外	男性	三千円
	女性	千円

【申込】

お寺までご連絡ください。

第26回 花園会ゴルフ大会

11月14日 於：山田ゴルフ倶楽部

第二十六回の花園会ゴルフが、山田ゴルフ倶楽部で開催されました。期せずして、このコースは防衛省の接待疑惑で一躍有名になった話題のゴルフ場でした。プレー費を各自で払ったにも関わらず、少しだけ接待気分を味わったようです。しかしながら、スコアは接待ゴルフ並みとはいかず、各自実力にあったものでした。成績は別



表の通り。
恒例のチャリティは、参加者が少なかったにも関わらず、四万二千二百円も集まり、いつも通り本花園会の「おかげさま献金」とさせていただきます、本山に送らせていただきました。

ドラコン・ニアピンをたくさん征した杉本氏が、優勝争いに顔を出していないのは不思議だと、参加者の声。



毎年恒例

圓福寺新年会のご案内

——毎年、和やかな楽しい新年会をしております。たくさんのおみなさんのお越しをお待ちしております。



新年会参加資格

- 一、彼岸とお盆にしかお寺に来ない人。
- 一、お寺はかたくるしい所だと思っっている人。
- 一、仏教や禅に興味のある人。
- 一、お酒の好きな人。
- 一、おいしいものが好きな人。
- 一、圓福寺のお守りが欲しい人。
- 一、当日時間のある人。
- 一、今年一年の無事を願う人。
- 一、一回出席してみても楽しかった人。

右の参加資格のうち、一つでも該当する人は参加することができます。



日時 一月二十日(日)

午前十一時 新春ご祈禱

正午 新年懇親会

会費 三千元

(ご祈禱料、お守り、お膳・飲み物代を含みます。)

会費は当日受け付けます。

申込 お申し込みはお寺までご連絡下さい。

圓福寺花園会

- 河西達雄
- 福田和夫
- 平山 実
- 塩月高泰
- 菅野光夫
- 稲田陽英